

朝を
ひらく

キリスト教の牧師さんと、まさかこんなに親しくなろうとは思ってもしなかった。修行を終えた息子が昨年、オーストラリア・ゴールドコーストでホームステイをしたお宅が、偶然プロテスタントの牧師さん一家だった。

ホームステイ中、「ところで、禅の修行で一番大切な考えはなんですか」と牧師さんは聞いた。息子はとっさに一言「now(今)」と答えた。ばかんとした顔の牧師さんに、息子はたどたどしい英語ながら話を続けた。少年野球で、走者が一塁から

牧師さんとの交流

永田 円了
真国寺住職



盗塁を試みる。走る。滑り込む。タッチセーフ！ 応援団は拍手喝采。両親も我が子の活躍に大喜び。しかし拍手している母親の目は笑っていない。一体あの汚れたユニホームは誰が洗うの、と心の中でささやく。皆が今を楽しんでいるのに、母親の心は今にない。

この話を聞いて牧師さんは瞬時に意味を理解する。「それなら『パワー オブ ナウ』という

本を知ってるか」と息子に尋ねる。息子は、その本ならマイ・フアザーが読んでるよ、と答えた。エックハルト・トール著「The Power Of Now」は1997年発行、北米だけで300万部売れたベストセラーである。

この会話がキッカケで私と牧師さんとの交流が始まった。そして今年9月のお彼岸中に、牧師さん一家が来日。自坊・真国寺での5日間のホームステイが実現した。2人のコミュニケーションは、文化・言語の壁を超えてどんどん深まっていった。お互い住職、牧師の仮面を脱ぎ捨て、1人の人間として接する。これが面白いのである。私の方は、宗教が宗派として

しか存在していない日本の実情などを愚痴る。一方、彼の方ははるか昔、アダムとイブが犯した罪(原罪)を、なぜに我々が今でも背負っていかなければならないのか、と愚痴る。法衣を着たままではどうしてできない会話であろう。

夜の坐禅会にも参加した彼、ビシッと響く警策の音を聞くごとに心に恐怖を感じた、と正直に語ってくれた。バイブルが説く原罪の重みが、知らず知らずのうちに反応したのであるだろうか。

宗教とは本来排他的なものである。自らの教義が一番と信じて疑わない。ぶつかり合いもする。戦争もする。宗教を生業にする者同士、異教徒に対しては守りの構えをするものである。今回の牧師さんとの出会いと交流は、奇跡なのだろうか。

壁超えて本音で問答